

# 虚像の「御主人」と幸福の倫理

——芥川龍之介「白」論——

西 貝 伶

## 一 はじめに

本稿の目的は、芥川龍之介「白」の最後の場面が一見「ハッピーエンド」「明るく幸福な結末」（詳細は後述）に見える点について、「御主人」という視点から再検討することである。

「白」は一九二三年八月に発刊された雑誌「女性改造」にて掲載されたのが初出である。書籍として「白」が収録されたのは、芥川の死後、一九二八年六月に発刊された「三つの宝」所収が初めてである。これまで多くの研究がなされてきた作品ではあるが、研究史には一つの潮流のようなものがあった。入江香都子はこの潮流について「実際、全五章から構成される物語の中で、従来は、作品の結末に論点が集中し、色の変化＝罪の象徴、最終章における白の「独り言」＝罪の告白、あるいは最後の場面においてお嬢さんに抱きしめられることそれ自体を罪からの（救い）等々と捉えた論が多くを占める」と述べている。さらに入江は、「この最後の場面に（救い）をのみ読みとり、明るく幸福な結末とする解釈は問い直されなければならないように思われる」とも主張する。入江がこのように述べたのは、

白が「義犬」と評されたり、「お嬢さんや坊ちゃん」に色が変化しただけで白だと認識されなかつたという点から、「五」章×××以降の「お嬢さんや坊ちゃん」と白の再会が描かれる最後の場面について「他者の目に映る姿のみによって自信を規定せざるを得ないという、決して通じ合うことのない、「ハッピーエンド」と表裏をなす結末」と考えたからである。

入江以前にも、有光隆司が「ハッピーエンド」「明るく幸福な結末」に疑義を投げかけている。有光もまた、「作品末尾の白と子供たちの再会の場面にしても、その「感動」はどこか不自然である」と述べた上で、「芥川童話の読者は、もうそろそろ、「御伽話しか知らない読者」を卒業し、「偽」の世界から抜け出て、もっと過酷な世界の現実を目を向ける時期がきたのではないだろうか」と主張する。このように有光が考えるのは、以下のような論理展開による。まず、最後の場面で白と「お嬢さんや坊ちゃん」が「涙の再会」を果たしたが、「お嬢さんや坊ちゃん」だけでなく白でさえも黒犬への差別感情があり、この差別感情は置き去りのままに物語が閉じられていることを指摘する。ここから「白」に戻れば、そこには芥川の深く暗い

人間意識が隠されている」と考え、上述のような主張をしたのである。

このように、入江や有光を中心に「ハッピーエンド」「明るく幸福な結末」を捉えなおす必要が言われているが、そういった研究はいまだ少ないのが現状である。そこで本稿では入江や有光の主張に則りつつ、「明るく幸福な結末とする解釈」を両者とは違う視点で問ひ直すことを試みる。

## 二 考察の視点

それではどういった視点で考察を進めていけば良いのか。「ハッピーエンド」は当然ながら白と「お嬢さんや坊ちゃん」との再会への解釈の一つである。この再会をどういったものか検討したいのならば、それが起こった原因から探る必要がある。ではこの再会はどうして起こったかという点、白が「主人の家」に帰ってきたからである。なぜ帰ってきたのか、それは白と「お嬢さんや坊ちゃん」の再会が描かれる「五」章×××以前に、白の折りとして描かれている。そこで、ここから検証していくこととする。

「…中略…わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しようとう決心しました。唯自殺をするにつけても、唯一目会ひたいのは可哀がつて下すつた御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんとはあしたにもわたしの姿を見ると、きつと又野良犬と思ふでせう。ことによれば坊ちゃんのパットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見る外に、何も願

ふことはありません。その為に今夜ははるばるともう一度此処へ帰つて来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会はして下さい。」

もし白の体色が戻らず黒いまま、坊ちゃんのパットに打ち殺されてしまつていたら、「白」の最後の場面は「ハッピーエンド」とは言えなかっただろう。「可哀がつて」もらいたいわけでもない白が主張したり、「わたしは御主人の顔を見る外に、何も願ふことはありません」と書かれていたりしても、読者はここに白が「お嬢さんや坊ちゃん」と再会すること以上の何かを読み込んでしまう。それはここで白が「お嬢さんや坊ちゃん」のことを「御主人」とも言い換えているところに起因しているのではなからうか。では、「御主人」とは何か？

「御主人」とは登場人物としての「お嬢さんや坊ちゃん」を指している。ただ、「御主人」という言葉は特定の人を指し示すことが出来るほかに、その人の性質をも表すこともある。すなわちこの折りの場面で白は、「御主人」である「お嬢さんや坊ちゃん」に会いたがつた、とも考えられる。最後の場面で「白は今では帰つて来たことを後悔する気さへ起しました」と語られるのは、実際に「お嬢さんや坊ちゃん」と再会できたが、「二」章で攻撃されたことを想起したためである。これはさらに、白が自ら望んだ「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」に会えていないことに起因している、とも考えられないだろうか。本稿ではこの点から、「御主人」にこだわって考察を進めていきたい。

詳細は後述するが、「白」には「お嬢さんや坊ちゃん」に関

する呼称として「御主人」のほかに「小さい主人」「主人の家」なる言葉も用いられる。これらの呼称が先行研究ではどのように扱われてきたのだろうか。

宮菌美佳は、「飼い主の家」や「白は再び飼い主に受け入れられたものの、飼い主の側は相変わらず体の色でしか白を認識できていない」などのように、「飼い主」なる概念を論考中では度々使用する。今泉康弘も「お嬢さんや坊ちゃん」を「飼主の子供」と述べたり、関連して「飼主の家」などという言葉も用いたりしている。これは「お嬢さんや坊ちゃん」に両親がいるという点に配慮しての言い回しであろう。このように「お嬢さんや坊ちゃん」を「飼主」と言い換えることで、今泉だけでなく宮菌も、「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」には触れていない。

本稿で先行研究として特に検討している入江や有光ではどうだろうか。有光は「お嬢さん」「坊ちゃん」という二人の子どもたち「作品末尾の白と子供たちの再会」だけでなく「茶色い仔犬をいじめる子どもたち」と述べる。すなわちナポ公をいじめた「子供たち」と「お嬢さんや坊ちゃん」を同じ「子ども」「子供」という言葉で括っている。

入江は、「飼い主」という言葉も用いているが、多くの場合で「坊ちゃん」「お嬢さん」という呼称を用いている。このほかに一度だけ「幼い主人たちに自分が白だと認識してもらえない場面」という言葉を使っている。「飼い主」という言葉を用いるのは、今泉と同様に作中でおそらく「お嬢さんや坊ちゃん」が両親と同居していることをふまえての使用であろう。ま

た「幼い主人」なる言葉は、有光のように「お嬢さんや坊ちゃん」の「子供」「子ども」的な側面に即しての使い回しだろう。

以上から、先行研究では白が会いたいと願った「お嬢さんや坊ちゃん」を「飼い主」「飼主の子供」や「子供」「子ども」として扱ってきたことが分かる。たしかに、実際に子どもであり作中で「小さい主人」ともいわれるように、「子ども」「子供」といった側面を「お嬢さんや坊ちゃん」は持っている。ただ、先行研究では「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」が問われたことはあまりないようだ。

以上から、「ハッピーエンド」を捉え直す一つの視座として、白は「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」と会えたのか？ という問題を考えるには、それに至る白の折しも詳細に検討されるべきである。この時、先行研究であまり触れられてこなかった「御主人」の意味も問われなければならない。そこで本稿では、作品内論理に即して「御主人」なるものを考えていくことで、「ハッピーエンド」を再検討する。

### 三 「主人の家」「小さい主人」「御主人」について

先述したように「白」では「お嬢さんや坊ちゃん」や飼い主を指し示す言葉に、「御主人」のほか「春夫さん」「姉さん」「小さい主人」などの呼称が登場する。考察を進める前に、まずはそれらの呼称を言葉が初めて出てくる場所やそれを誰が用いたのか、という点を中心に整理していく。

「お嬢さんや坊ちゃん」の両親「お父さん！ お母さん！」も家に同居していることが示唆されているが、作中で姿を見せ

る白の飼い主は「お嬢さんや坊ちゃん」だけである。「お嬢さん」「坊ちゃん」という呼称は、白と語り手が用いる。初登場は、「二」章での語り手による二人の「ボオル投げ」遊びを説明する場面である。そして、白がそれを見た直後に「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日は大殺しに遇ひましたよ」と発話するのが、白によってこの言葉が使われた最初である。また、同様に「二」章で「お嬢さん」が「春夫さん」と、「坊ちゃん」が「姉さん」と呼んでいた場面が、「お嬢さんや坊ちゃん」という言葉がこの二人によって使用された最初で、「五」章×××以降にも二人は相互に呼び合う。さらに「一」章、「三」章×××以前、「四」章では、「お嬢さんや坊ちゃん」に関する描写はなかった。

主人という言葉は「主人の家」「小さい主人」「御主人」の三種類が用いられていた。「二」章冒頭での「主人の家」と語り手に述べられる場面が、「白」における飼い主に関する描写の一番初めである。この「主人の家」という言葉は「五」章×××以前の、白がそこに帰ってきた場面で、ここでも語り手によって使用されている。「小さい主人」の登場は、「坊ちゃん」が白をバットで殴ろうとして、それから白が逃げて「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ」と発話する前に「白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました」と語り手が述べたのが最初である。その後は「五」章×××以降で、白を見た「お嬢さんや坊ちゃん」の会話に白が目覚まし「白は小さい主人の声にはつと目を開きました」と語り手によって語られる。以上「主人の家」「小さい主人」はともに、

作中で二回、語り手によってのみ使われていた。登場箇所は「主人の家」が「二」章冒頭、「五」章×××以前冒頭で、「小さい主人」は「二」章中ほど、「五」章×××以降のはじめのほうであった。

それでは「御主人」はどうだろうか。「御主人」の初登場は「三」章×××以降の「ナボ公」による発話であった。「ナボ公」は白によって命を助けられ、それのお礼がしたいと述べるために、「まあお待ちなさい。おちさんの御主人はやかましいのですか？」とまずは白に伺いを立てる。しかし、白はその意味が分からず「御主人？ なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」と答える。これが白によって「御主人」という言葉が使われた最初である。その後に「ナボ公」は御主人が「やかましくなければ」お礼をさせてほしいと申し出る。その後、先述したように「五」章×××以前で「唯自殺をするにつけても、唯一目会ひたいのは可哀がつて下すつた御主人です」「わたしは御主人の顔を見る外に、何も願ふことはありません」と白が願う。以上が、「白」作中における「御主人」という言葉が使われた全てである。すなわち「御主人」なる言葉は「三」章×××以降、「五」章×××以前に、白と「ナボ公」によって用いられていた。

以上から、「お嬢さん」「坊ちゃん」は白も語り手も用いるが、白は決して「小さい主人」「主人の家」という言葉は用いず、語り手は「御主人」なる言葉を使わないことが明らかにになった。白が「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」に会いたいと願う、その後に二人と再会したことを問い直すためには、この

点も考えなければいけないだろう。語り手は「御主人」なる言葉は決して使わないのだから。そこで以下ではまず「ナボ公」と白の会話から「御主人」なるものを考えることを出発点として、「主人の家」「小さい主人」も検討していく。

#### 四 白にとって「御主人」はどういった存在か？

まずは改めて「ナボ公」と白の会話から、作中における「御主人」なるものを考えていく

「まあお待ちなさい。おちさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜ又そんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此処に泊って行つて下さい。それから僕のお母さんにも命拾ひの御礼を云はせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ、ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走があるのです。」

先述したように、白はナボ公が「おちさんの御主人はやかましいのですか？」と尋ねてきたことの意味が分からず、質問を質問で返す。そして「ナボ公」はお礼がしたかつたらと「もし御主人がやかましくなければ、今夜は此処に泊つて行つて下さい」と述べる。白はいったい何が分からなかつたのか。それは「御主人」の判断には基本的に従う、という「ナボ公」が持つ「御主人」認識であろう。

白は「二」章で「お嬢さんや坊ちゃん」に放逐された時「あ、けふから宿無し犬になるのか？」と述べる。飼う犬に餌や住処を提供するのは飼主である。ただ、飼主と「御主

人」はイコールではない。すなわち、「ナボ公」に会うまで、白は「お嬢さんや坊ちゃん」を飼主として考えていたということである。では飼主と「御主人」の違いは何か。「御主人」とは、ある者がその存在の指し示す規範に従う存在、といえるだろう。そして、「ナボ公」はその意味を白に指し示した。「御主人」が「やかましく」白の行動を制限しない場合、お礼を受け取つてほしい、と白の質問の後に改めて説明したのである。さらに「ナボ公」と白は以下のような会話を続ける。

「ちや名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナボレオンと云ふのです。ナボちゃんだのナボ公だのとも云はれますけれども。——おちさんの名前は何と云ふのです？」

「おちさんの名前は白と云ふのだよ。」

「白——ですか？ 白と云ふのは不思議ですね。おちさんは何処も黒いちやありませんか？」

白は胸がいばいになりました。

「それでも白と云ふのだよ。」

白という名は白自身が付けたものではないだろう。そして、その名は誰よりも「お嬢さんや坊ちゃん」が呼ぶものであつたはずだ。「白——ですか？ 白と云ふのは不思議ですね。おちさんは何処も黒いちやありませんか？」と、白は「ナボ公」にその名を取り上げられそうになる。白という名がなくなること、白と呼ばれなくなことは、白にとって「御主人」がいなくなることと同じである。そして、白は「それでも白と云ふのだよ。」と述べる。ここは、白が「ナボ公」とのやり取りを経て、その名を呼んでくれた「お嬢さんや坊ちゃん」を「御主人」と

すると宣言した場面と考えられる。それはとても固い決意だ。

しかし。入江は「外見によらない自己同一性を繰り返して訴え続けた気持ち、その過程で変化したことが分かる」と述べている。ただ、改めてこの「ナボ公」と白の対話と、折りの場面をふまえて考えると、違う様相も浮かび上がってくる。

東京日日新聞。昨十八日（五月）午前八時四十分、奥羽線より急行列車が田端駅附近の踏切を通過する際、踏切番人の過失に依り、田端一二三会社社員柴山鉄太郎の長男実彦（四歳）が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死を遂げようとした。その時遅しい黒犬が一匹、稲妻のやうに踏切へ飛びこみ、目前に迫つた列車の車輪から、見事に実彦を救ひ出した。この勇敢なる黒犬は人々の立騒いでゐる間に何処かへ姿を隠した為、表彰したいにもすることが出来ず、当局は大いに困つてゐる。

東京朝日新聞。軽井沢に避暑中のアメリカ富豪エドワード・バアクレエ氏の夫人はベルシア産の猫を寵愛している。すると最近同氏の別荘へ七尺余りの大蛇が現れ、ヴェランダにゐる猫を呑もうとした。其処へ見慣れぬ黒犬が一匹、突然猫を救ひに駆けつけ、二十分に亘る奮闘の後、とうとうその大蛇を噛み殺した。しかしこのけなげな犬は何処かへ姿を隠した為、夫人は五千弗の賞金を懸け、犬の行衛を求めてゐる。

「度々危い人命を救つた、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。又一時「義犬」と云ふ活動写真の流行したことを」と「四」章の新聞の場面で語られるように、白は「ナボ公」と別れた後、

度々人の命を救つた。その勇ましさを評して黒い体色の白は「義犬」として世間に評された。それは全てが人から感謝されたものではないが、「東京日日新聞」「東京朝日新聞」などでは白に恩賞を与えようとしている。ただし「ナボ公」を助けた時にも、白はその見返りとしてのお礼を受け取らなかつたように、白は戦うことで与えられる利益を受け取るうとしない。

「五」章×××以前の折りの場面で「黒いのがいやさ」「黒いわたしを殺したさ」にあらゆる困難と戦つてきた後に「わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しやうと決心しました」と白が述べるのは、白にその指針を指し示してくれる「御主人」がいらない辛さゆえのものではなからうか。新聞の場面で描かれたように、白は「義犬」として評価されている。白は犬なので新聞は読めないが、「ナボ公」の申し出を断つたように、これら白に親和的な態度をとる者たちの恩賞や評価を受け入れていない。もしかしたら、こういった人たちは白の新たな「御主人」になりえたかもしれない。ただ、戦うことで評価されることを、新しい「御主人」を、白は受け入れない。白が「それでも白と云ふのだよ。」と宣言してからは、白は自身が考える「御主人」が規定してくれたはかなぬ白として生き続けてきたのだ。

すなわち入江とは異なり、「それでも白と云ふのだよ。」という白の宣言以降、外部から「義犬」と評される生活を経て月への折りまで、白は自身が考える「御主人」に規定された白のまま生きてきた、と本稿では考える。そして、「ことによれば坊ちゃんのパットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔

を見る外に、何も願ふことはありません」というのは、ナポ公が述べた「御主人」は指針を与え判断する者という価値観を白が引き継いだ上で、白は黒いままでも「御主人」としての「お嬢さんや坊ちゃん」に会えるのか、それとも「狂犬」などとまた評されて「坊ちゃん」に殺されてしまうのか、その判断に従うということである。以上から、白は自身を判定してほしいがために他ならぬ「お嬢さんや坊ちゃん」を「御主人」として求め続けた、と本稿では主張する。

## 五 「主人の家」について

語り手の述べる「主人の家」とはいったいどういった場所なのか。ここでは、それを考察する。

「畜生！ まだ愚図々々してゐるな。これでもか？ これでもか？」 砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲む位当つたのもあります。白はとう／＼尻つ尾を巻き、黒塀の外へぬけ出しました。

白は体色が黒くなったことで、「お嬢さんや坊ちゃん」に暴力によって家の外に排除されてしまう。では、家の中は暴力で維持される空間なのだろうか？

「何処の犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは相不変気味悪さうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバツトをおもち

やにしながら、考え深さうに答へました。

「こいつも体中まつ黒だから。」

体色が黒色になり、家に帰ってきた白に対して、「お嬢さんや坊ちゃん」は以上のように述べる。すなわち、隣の色黒の兄弟だと考え、この時点では黒い体色の白を攻撃しない。

白は気でも違つたやうに、飛び上つたり、跳ねまはつたりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしませう？ 春夫さん。この犬はきつと狂犬だよ。」

お嬢さんは其処に立ちすくんだなり、今にも泣きさうな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢です。白は忽ち左の肩をばかりとバツトに打たれました。と思ふと二度目のバツトも頭の上へ飛んで来ます。

白が自身の体色が黒くなつて「気が違つたやう」な行動を「お嬢さんや坊ちゃん」が見て、「お嬢さん」によって与えられる「狂犬」「野良犬」という評価。これにより白は攻撃を受けることになる。すなわち、黒色の体色の白は、その体色変化によって白として「お嬢さんや坊ちゃん」に受け入れられないのだが、見知つた隣家の黒の関係ならば攻撃を受けないで済んだのである。しかし、「狂犬」「野良犬」は「お嬢さんや坊ちゃん」の知らない存在で、それを無条件で受け入れることは出来ない。「一」章で「犬殺し」が描かれていたが、これは主に昭和以前に存在した狂犬病予防のために野犬を殺処分する業者のことである。当時の情勢からも考えて、「狂犬」「野良犬」と判断された時点で、「お嬢さんや坊ちゃん」の排除行動は当然の

ことである。

お嬢さんは白を抱きしめた儘、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは一御覧なさい、坊ちゃんの威張つてゐるのを！

「へつ、姉さんだつて泣いてゐる癖に！」

「唯一目会いたいのは可哀がつて下すつた御主人です」と白が祈つたり、白の体色が戻り「お嬢さんや坊ちゃん」に受け入れられたりする場面から、白は体色が白色だった時は「お嬢さんや坊ちゃん」に可愛がられており、それには暴力などなかったこともここから分かる。

家の中では、白の体色が白ければ可愛がられ、一方で家の外では白が戦うことでその恩賞として親和的な態度をとられる。入江も指摘しているが、白が「お嬢さんや坊ちゃん」に体色からのみに自己同一性を与えられていたことが以上からも分かる。そういった判断をする者がいる場が「主人の家」である。これは家に帰ってきた白も理解していることだが、ここにいる「お嬢さんや坊ちゃん」が語り手には「小さい主人」であり、白にとっては「御主人」である。次節で、この違いを考える。

## 六 「御主人」と「小さい主人」の齟齬

「御主人」とは、規範的な判断を下し、それを受け入れる存在であった。そして、「主人の家」で下される判断は明快で、白が白色ならば受け入れられ、「狂犬」「野良犬」と判断されたら攻撃を受け、見知った存在ならば攻撃されない、というものである。白はこのような判断を理解した上で「勿論お嬢さんや

坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつと又野良犬と思ふでせう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です」と自身の体色が黒いままで、「御主人」の判断を求めた。もし体色が黒いままの白が朝に「お嬢さんや坊ちゃん」と再会していたら、受け入れられたとしても「お隣の黒の兄弟」で、白自身の言うように攻撃されていたかのどちらかである。

しかし、「お嬢さんや坊ちゃん」は白の折りを判断しなかった。それは、白の体色が戻ってしまい、体色が白いかつての白として受け入れたからである。最後の場面で「白は一度挙げた目を又芝生の上へ伏せてしまひました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまつ黒に変つた時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの時の悲しさを考へると、——白は今では帰つて来たことを後悔する気さへ起しました」と語られるが、ある願いや行動を後悔すること、その願いや行動を棄却することは異なる。この描写によつて白が折りを後悔して、その上で本当は暖かい再会をしたかったと「お嬢さんや坊ちゃん」との再会によつて考えを変えたと読めたとしても、白の折りが本当は「お嬢さんや坊ちゃん」と暖かい再会をしたいというものだった、とすることは作品内論理に従えばできないだろう。

そもそも、有光が重視したように「お嬢さんや坊ちゃん」は「子供」「子ども」である。入江はことさらにそれを強調するやうに、体色が黒くなった白を白だと認識できない「お嬢さんや坊ちゃん」を「小さな主人」でなく「幼い主人」と述べていた。「白」において「子ども」は「ナボ公」をいじめていた者らの



ことでもあり、ここから作中でも「子ども」はまだ十分に倫理的な判断ができない存在として描かれているといえる。

では「小さい主人」ではなく「御主人」の判断とはどのようなものなのか。それは先に挙げた「東京日日新聞」「東京朝日新聞」以外にも、以下の「四」章の新聞の場面を読むことで分かる。

読売新聞。小田原町城内公園に連日の人気を集めてゐた宮城巡回動物園のシベリヤ産大狼は二十五日（十月）午後二時ごろ、突然騒々な檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその為に非常動員を行ひ、全町に亘る警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ、右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合ひを初めた。黒犬は悪戦頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至つた。其処へ警戒中の巡査も駆けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス、チガンテイクスと称し、最も兇猛な種属であると云ふ。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてゐる。等、等、等。

白は「狼」を「噛み伏せ」たが、これについては恩賞が与えられない。これは、「狼」を白が負かすことによつて、「宮城動物園主」が不利益を被つたからであらう。先に、新聞の場面に出てくる大人たちは白の新たな「御主人」になり得るかもしれないと述べた。ここから、白の行動を人間社会の価値観で判断することが「御主人」ならば、それには成熟が必要だ。「子ども」の反対は大人である。ならば、「お嬢さんや坊ちゃん」が

単純に大人であれば「御主人」になれたのであらうか。

黒い体色の白を白だと認識したり、見知らぬ「狂犬」「野良犬」を攻撃したりすることは、「犬殺し」が描かれているように、また新聞の場面で野犬の処理を中止すると市長が述べているように、「子ども」だけでなく大人でもしていたことであらう。しかし、分らないとはいへ飼ひ犬を「打ち殺」そうとするような存在は「御主人」だらうか。

実は白が望む「御主人」は虚像なのだ。白は「お嬢さんや坊ちゃん」と別れた後に、「ナボ公」の価値観を受け継いで、この二人の中に「御主人」なるものを見出だす。しかし、あくまで「お嬢さんや坊ちゃん」は語り手が述べるように「小さい主人」でしかないのだ。これには「子ども」という側面もあるが、白の望む判断がそもそも「御主人」の行為ではない。入江も「幼い主人」というように、「御主人」として成熟していない「お嬢さんや坊ちゃん」しか白にはいない。そのために、白の望んだ「御主人」の判断もまた、成立しえない虚構でしかないのである。そして、「それでも白といふのだよ」という白の宣言は、他でもない「御主人」が規定してくれた白として生きるといふ決意ではあるが、これもまた虚像の上のアイデンティティということになつてしまふ。

しかしその犬小屋の前には米粒ほどの小ささに、白い犬が一匹坐つてゐるのです。清らかに、ほつそりと。——白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いてゐるわよ。」

白は「恍惚」に自身を「見入り」、「お嬢さんや坊ちゃん」も

白との再会に涙する。ただ、入江はこの場面を「必ずしもこれが幸せな結末とは思えない」とも述べている。たしかに、白の切なる願いもはぐらかされ、ついで白は「御主人」には会えなかった。そればかりか、白の想う「御主人」が虚像であるために、この願いは判定される以前に成立もしていなかった。白の望む「御主人」は、「ナボ公」の「御主人」など、住む世界が違ふところに存在しているだけである。

しかし、いかな問題があつても、やはり白と「お嬢さんや坊ちゃん」の再会は暖かいものであり、両者にとつて幸福であるとも読める。「ハッピーエンド」を捉え直すということは、必ずしも幸福を不幸だと読み替えることではない。本稿において「白」は、折りも届かず、会いたい「御主人」にも会えなかったが、そういった空しさや哀しさを内包しての「ハッピーエンド」であると考え。そもそも、幸福は必ずしも倫理的ではないのだから。

こういった幸福の裏で棄却されてしまった折りやその問題を考えることで、現代を生きる我々の幸福観も問い直すことが出来る。ここに、著者は今なお「白」を読む一つの価値があると考え。

注1 本稿は、二〇一六年十一月三日に近代文学合同研究会第

二回若手研究者集会で司会、服部徹也（慶応義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程・慶応義塾志木高等学校国語科非常勤講師）、コメンテーター、副田賢二（防衛大学校人文社会科学群人間文化化学科准教授）の下

で発表した「芥川龍之介「白」論——ご主人をめぐるたつたひとつの冴えたやりかた？」の内容を元に著したものである。また、本稿中の「白」引用は、全て「芥川龍之介全集」第十卷（岩波書店、一九九六年）に拠った。

2 入江香都子「芥川龍之介「白」——名前をめぐる物語」『福岡大学日本語日本文学』一五、一七—三〇頁、二〇〇五年。

3 有光隆司「芥川龍之介の童話を読み直す(1)——「白」をめぐる——」『清泉文苑』一八、九八—一〇八頁、二〇〇一年。

4 宮蘭美佳「芥川龍之介「白」考——死者の声に導かれて」『キリスト教文学研究』三三、一一〇—一二二頁、二〇一六年。

5 今泉康弘「見る。ことの喪失と回復——芥川龍之介「白」「あばばば」「菌車」ほかの考察」『日本文学論叢』三八、一八—二八頁、二〇〇九年。

6 杉本優「下人が強盗になる物語——「羅生門」論——」『日本近代文学』四一、二七—三六頁、一九八九年。「白」ではないが、杉本は「羅生門」において芥川が主人公を「一人の男」「一人の侍」を経て「一人の下人」という呼称に決定したことに触れた上で、作中の倫理的問題や「下人」の主従関係について論じている。この視点は、「白」の本研究にも有効であるように思われる。まず、芥川が呼称にこだわっているという点は、「白」にも多様な様相を見せる「御主人」関係の描写があるこ

とから反映されていると考えられる。そして、このような「羅生門」の倫理的問題を呼称からアプローチした研究があるように、「白」の「ハッピーエンド」という問題も、「御主人」という呼称から検討することで、何か新しい作品の様相を明らかにできるだろう。

(本学大学院博士課程)